

十勝川直轄砂防区域の歴史①

〜四千万年前から江戸末期〜



札内川の源流 長大な日高山脈

今から四千万年前

札内川の誕生

札内川の誕生は、日高山脈の誕生で語らねばならない。日高山脈は北米プレートとユーラシアプレートが今から約四〇〇万年前に東西からせめぎ合い、衝突を始め、褶曲（しゅうきよく）・東西からの圧力で山や谷ができてきた（シ）しながら隆起し、今から一五〇〇万年前に日高山脈を作り上げました。そして一六〇万年前〜二五〇万年前の新生代第四紀更新世という時代に氷河期が到来し、八十五万年前のギュンツ氷期に本格的氷河時代となりました。



北米プレートとユーラシアプレートの衝突で日高山脈ができた

その後、ミンデル、リス、ヴュルム氷期と、それぞれの間に三回の間氷期が繰り返されました。最終氷期であるヴュルム氷期は七万年前から一万年までの六万年間続きました。その氷期も終わりに近づくと、気候も温暖化してきたので、日高山脈を分厚く覆っていた氷河はゆっくり移動しはじめ、その摩擦で日高山脈の岩盤をけずりながら下り始めました。山頂付近では岩盤をスプーンでえくり取ったような凹地形（カール）を作り、また谷間に流れ込んだ氷河は谷の両壁をけずりながら下り、U字谷を作りました。また氷河は、巨大な岩塊や土石を下流にまで押し流し、これが札内川の河床となりました。



日高山脈カムイエクウチカウシ山とハの沢カール

第四期の時代区分				
地質時代	氷河年代	文化・人類	時期	
第三紀	鮮新世	ドナウ氷期	200万年前	
		前期	間氷期	150万年前
			ギュンツ氷期	100万年前
		中期	間氷期	前期旧石器時代 (猿人・直立猿) 250万年前〜15万年前 北米人 60万年前 秩父人 50万年前
間氷期	50万年前			
第四紀	更新世	間氷期	15万年前	
		氷水期Ⅰ	7万年前	
		間氷期	4.5万年前	
		氷水期Ⅱ	3.3万年前	
	後期	間氷期	2.9万年前	
		氷水期Ⅲ	2.2万年前	
		間氷期	1.65万年前	
		氷水期Ⅳ	1.3万年前	
完新世	後氷期	新石器時代 (縄文・弥生)	1.3万年前	

旧石器時代から縄文時代

十勝川砂防区域の埋蔵文化財から

十勝川砂防区域には、6箇所の埋蔵文化財包蔵地があります。これらは、旧石器時代から縄文時代のもので、一万年以上前から、この砂防区域の大自然の中で、人の営みがあったのです。



十勝川砂防区域にある埋蔵文化財包蔵地

名称	所在地	時代・時期	出土遺物
ヌブカクシュナイ1遺跡	中札内村字ヌブカクシュナイ3-1	縄文・続縄文	土器、石鏃
ヌブカクシュナイ2遺跡	中札内村字ヌブカクシュナイ基線9-7、11-1	先石器 旧石器時代後期	石刀 影器
新札内1遺跡	中札内村字上売買東4線195-2.195-4.197-4	先石器・縄文 旧石器、縄文前期	石刀、土器片 黒曜石製石器 土器片 石鏃
新札内2遺跡	中札内村字上売買東4線191-3、191-8	縄文前期	土器片、剥片
戸高遺跡	帯広市岩内町東2線7-1.8-1.2.3	縄文前期	土器片、剥片
八千代G遺跡	帯広市八千代町基線209、211.212	縄文中期・晩期	土器片

江戸末期

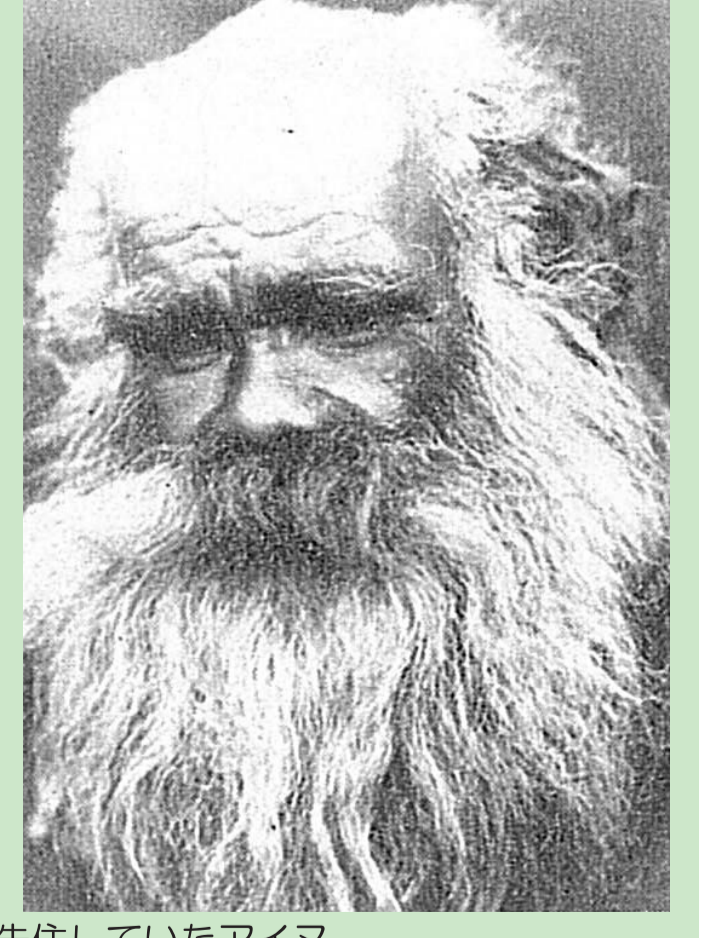
松浦武四郎の十勝探検とサツナイコタン

蝦夷地（えぞち・北海道）の御用御雇に任じられた松浦武四郎は、安政四年（一八五七）箱館奉行の命を受け翌年にかけて、蝦夷地の調査に当たり、特に安政五年（一八五八）には三月と七月の二度にわたって十勝の調査に入りました。中でも、七月の調査は七月十四日に日高から広尾に入り、大樹、更別、札内（幸震・サツナイ）、戸高、芽室、音更、止若（幕別・ヤムツカ）を経て、七月二十一日大津に至り、幌泉、浦河を経て箱館には八月二十一日に帰着しています。この探検調査の記録は「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」（ほことうざいえぞせんせんちりのしらべにっし）、略して戊午日誌に記されています（以下「戊午日誌」の訳文）。

『安政五年七月十四日、広尾の十勝会所（開拓使の出先機関、幕吏を派遣し旅宿所・馬駅も配して十勝の管理に当たる）へ到着。会所の支配人である元吉にサツナイの酋長マウカアイの弟イソムラを案内人として雇いたい旨を伝う。七月十五日ヘルフネ（歴船）を出てアシリコタン（大樹）に着く（泊）。

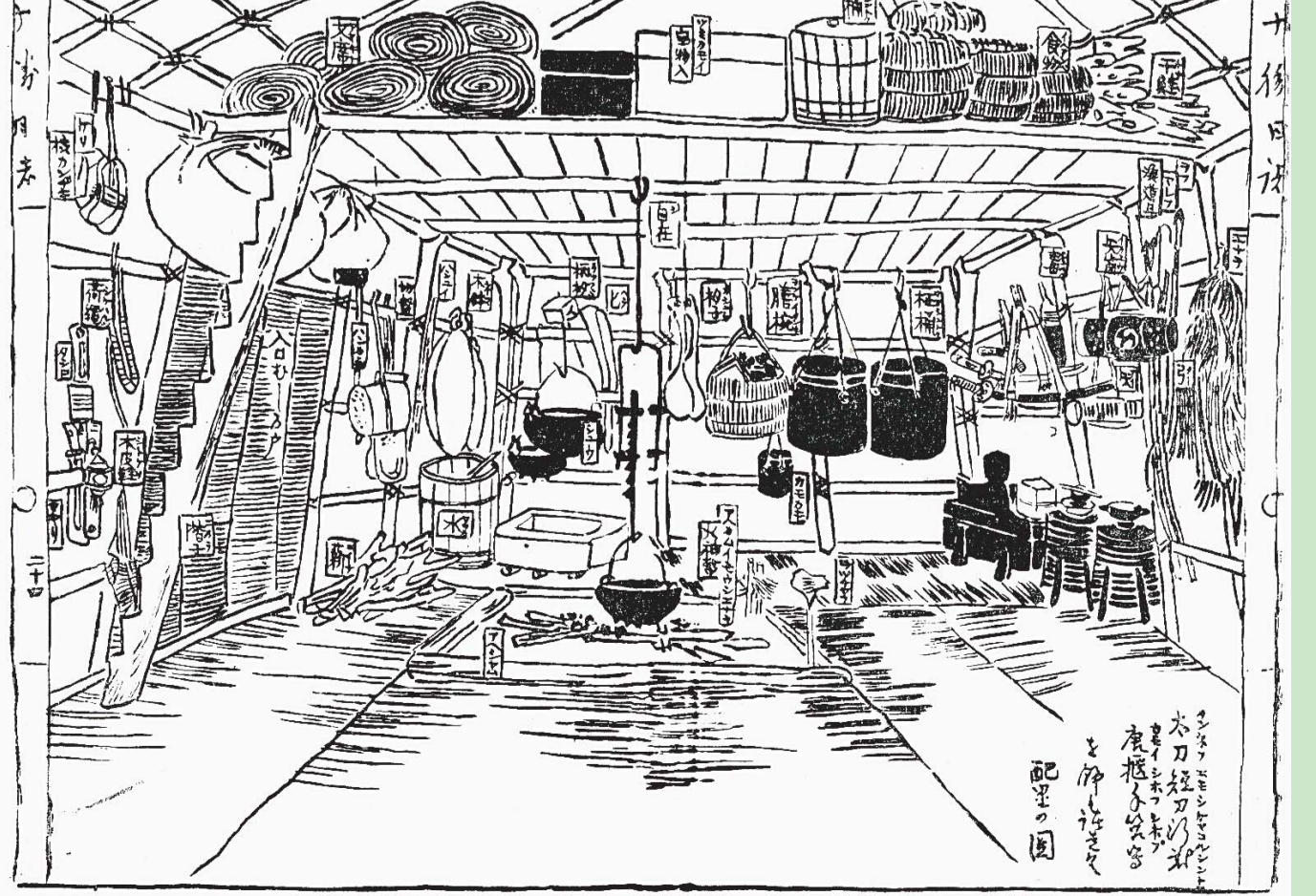


松浦武四郎 (1818~1888)



先住していたアイヌ (中札内村 1968年 『中札内村史』)

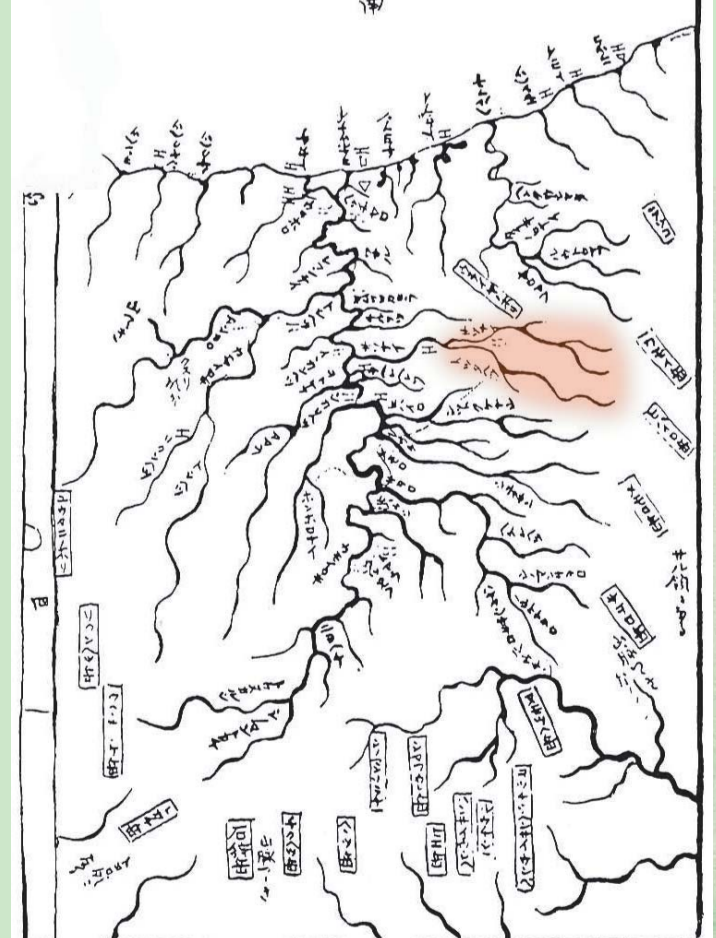
七月十六日小川を超えサルブツ（更別川上）にきた。ネシコボ川（胡桃の多い川）を越え下ると向こうの方から陣羽織を着たサツナイの酋長マウカアイが、子ども一人を連れて出迎えにやってきた。今朝イサクンサンが、わたし（武四郎）が来ることを知らせたので、出迎えに来てと言った。わたしの馬の口を取って川を引き渡した。サツナイコタンは川の北岸にある村で、土地が肥沃なので少しの畑を作っている。人家が五軒あって、サツナイの本村である（中札内村元札内付近）。わたし泊まる家の主人はサツナイの酋長マウカアイ四十六才、妻イタタシ三十六才から家内五人で暮らしている。家も相当に大きく、行器（生活用具）や太刀、短刀も多く持っている。このマウカアイは案内人イソムラの兄に当たる。



アイヌの家の中の様子 (松浦武四郎 『十勝日誌』の挿し絵)

その隣家は家主ウエントロク四十二才で、この人はヒハウシのシリコタン、酋長の妾とのこと。その隣家は家主ハシユオク三十五才、妻トシヤリ二十二才、弟夫婦も同居しており四人暮らしてであるが、皆雇に出ており空き屋になっている。わたしは酋長の家に止宿したが、鹿の鮮肉と鱒をたくさん出してもてなしてくれた。わたしも酒を土産にやったので大勢で宴会になった。

七月十七日、朝早くより霧深い今日は是非ヒハイロ（上美生）の川筋までと思い、支度をす。七人ほどアイヌを雇い、荷物を持たせ出発する。サツナイからおよそ二里（七・八キ）、イワナイに至る。さらに二十丁（二・一八キ）のところにトツタベツ村があった。川向こうに人家がある。屋前につきハウサナル八十七才の家で休む。ハウサナルはこのあたり一番の長老で家内五人で暮らしている。その隣家は家主センピン三十五才、妻ユウクテ二十五才で、弟夫婦も同居している



十勝日誌に記録されていた十勝の川 (松浦武四郎 『十勝日誌』の挿し絵)

が、男二人は浜へ働きに出ていた。ハウサナルは鹿肉などを出して大層おごそうになった。また昔のことをよく知っており、たくさん話してくれた。

松浦武四郎『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』より